

米国金利見通し

2022年に2回、2023年に3回の利上げを予想

2021年12月6日

お伝えしたいポイント

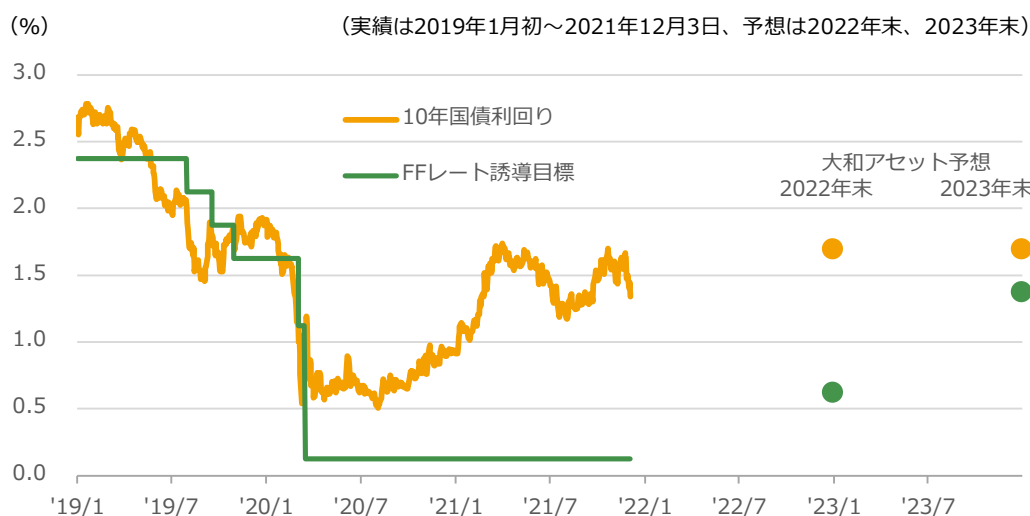
- ・ 米国は2022年に2回、2023年に3回の利上げを行うと予想
- ・ 利上げ前倒しを見込むものの、長期金利の上昇は限定的と想定
- ・ 利上げ開始で株式市場が直ちに下落基調に転じるリスクは小さい

米国は2022年に2回、2023年に3回の利上げを行うと予想

当社ではこれまで、米国の利上げは2023年からと予想（投資環境見通し2021年12月号p5など参照）していましたが、2022年から利上げが実施されると見通しを変更しました。具体的には2022年に2回、2023年に3回の利上げを予想しています。

米国ではCPI（消費者物価指数）の上振れが続いており、従来、インフレは一過性と分析していたパウエルFRB（米国連邦準備制度理事会）議長も、11月30日（現地、以下同様）の議会証言で一過性との見方を撤回しました。同時に議長は量的金融緩和の早期終了を検討するとも述べています。12月14-15日のFOMC（米国連邦公開市場委員会）では、量的金融緩和の終了時期が2022年6月から3月に前倒しされそうです。これにより利上げも前倒しされ、2022年半ば頃から行われると予想します。FRBはインフレの上振れを容認しつつ金融緩和を行っていましたが、上振れが許容レベルを超えてきたようです。

米国金利の推移：実績と予想



※FF（フェデラルファンド）レート誘導目標は目標レンジの中心値を表示

(出所) ブルームバーグより大和アセット作成

利上げ前倒しを見込むものの、長期金利の上昇は限定的と想定

利上げが前倒しされると、長期金利に上昇圧力がかかるとの見方もあります。しかし、当社では長期金利はあまり上昇しないと考えています。具体的には10年国債利回りを見て、2022年末、2023年末とも今年のピーク水準に近い1.7%程度に留まると予想しています。

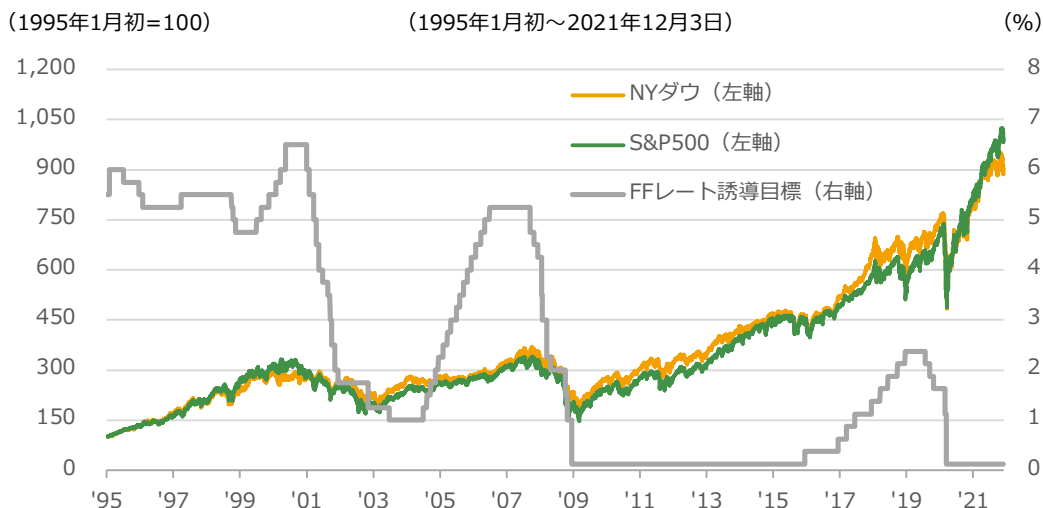
これは利上げが前倒しされる結果、長期金利が織り込む将来的なインフレリスクや景気過熱リスクは逆に低下すると考えられるためです。実際、足元の利上げ前倒し観測の高まりにもかかわらず、10年国債利回りが3月末の水準を超えていない点は、そのような見方が強まりつつあることの示唆といえそうです。

利上げ開始で株式市場が直ちに下落基調に転じるリスクは小さい

一般に金利の上昇は株価の悪材料と言われることが多いため、利上げ開始で株式市場が下落基調に転じるのではないかと警戒論もあります。しかし、当社ではそのリスクは小さいと想定しています。

利上げが開始されるのは、利上げしても不況に逆戻りしないと中央銀行が確信を持てる時です。したがって、最初の利上げを行う時の景気は非常に強く、その後も景気の強い状態が続くことが多いといえます。基本的には、株価は業績の変数であり、業績は景気の変数ですから、景気の強い状態が続く時に株価が弱まるとは考えづらいでしょう。実際、過去をみても利上げとの関係で株価がピークをつけるのは、複数回の利上げ後、もう利上げが必要なくなる頃、言い換えると景気が弱まり始める頃です。そのような時期は、まだかなり先になると考えられます。

米国の政策金利と株価指数の推移



※FFレート誘導目標はレンジで示されている場合、レンジの中心値を表示

(出所) ブルームバーグより大和アセット作成

当資料のお取扱いにおけるご注意

- 当資料は投資判断の参考となる情報提供を目的として大和アセットマネジメント株式会社が作成したものであり、勧誘を目的としたものではありません。投資信託のお申込みにあたっては、販売会社よりお渡しする「投資信託説明書(交付目論見書)」の内容を必ずご確認のうえ、ご自身でご判断ください。
- 当資料は信頼できると考えられる情報源から作成しておりますが、その正確性・完全性を保証するものではありません。運用実績などの記載内容は過去の実績であり、将来の成果を示唆・保証するものではありません。記載内容は資料作成時点のものであり、予告なく変更されることがあります。また、記載する指数・統計資料等の知的所有権、その他一切の権利はその発行者および許諾者に帰属します。
- 当資料の中で個別企業名が記載されている場合、それらはあくまでも参考のために掲載したものであり、各企業の推奨を目的とするものではありません。また、ファンドに今後組み入れることを、示唆・保証するものではありません。